

災害で気付く現代生活の脆弱性

今朝も災害のニュースで目覚めた。現代の我々の生活において電気が使えず、スマホが通じない状況はあり得ないことであるが、それが起きてしまった。まずは北海道胆振地方の地震である。マグニチュードが6.7というのだから日本ではまあある規模の地震で、まず心配された泊原発は非常電源が作動して冷却システムが正常に作動しているとのことで一安心。ただ北海道中が全面停電になってしまったのである。現代の電力供給システムは広域化しており、その中の需給バランスが崩れると全体が一旦シャットダウンしてしまうそうである。全体の立ち上げには極めて微妙な均衡をとりながらのオペレーションが必要であり、地震で止まった火力発電所を動かすため、関係がなさそうに思える水力発電所の発電量をまず上げることが行われるそうである。本稿を読者が読まれる頃には北海道の電力供給は復旧していると思うし、そうでなくては困るのだが、我々が空気のように当然に享受している電気においても、安定供給は累卵のような危ういシステムに依存しているのである。

台風21号の被害についても同様の脆弱性にショックを受けた。関西国際空港は、24時間運用可能な海上空港の先駆けとして大阪湾泉州沖に開業して24年、阪神淡路大震災の時には被災地支援の重要な拠点として機能、最近ではインバウンドを牽引し関西圏の経済を支えてきた空港だ。台風21号は確かに近年では経験のなかった強烈さで日本を襲ったが、空港の全面閉鎖にまでなり、何千人という旅行者が停電した空港内で難民状況で一夜を過ごすことになるとは誰も想像していなかったと思う。フランス人と思われる女性がスマホが使えず国の両親に安否も伝えられないと涙ながらにテレビクルーに語っていた。なにかがおかしかったのだ。空港島と本土を結ぶ連絡橋にタンカーがぶつかったことも大問題だが、空港全体のシステムを支える電源の確保を図る基幹設備が浸水の危険がある地下に設置されていたという問題に警鐘を鳴らしておきたい。大阪湾は台風の直撃を受けにくいとされてきた地域だ。私も関西在住の頃「こちら辺は関東のように地震

が多いこともないし、台風も四国や九州がブロックしてくれるから安全なんや」と言われ確かにそうだなと思っていた。こうした思い込みは阪神淡路大震災で手厳しく否定されたのではなかったのか？室戸台風の経験に誰も学んでいなかったのか？と暗澹たる気分になった。

このような危うさは、効率性と便利さを重視して様々な選択を行ってきたことと引き替えに我々が手に入れてしまったものではないか。電力供給システムもそうであるが、インターネット等通信、コミュニケーションの世界ではどこまでもオープンにつなげていくことによって便利さが向上する反面、様々な危険が増大しているのである。交通体系でも路線を越えた接続が進み、湘南で事故があると宇都宮の電車まで止まってしまう状況になっている。

こうした現代生活の危うい状況から少し離れたところにあると考えられる農業・農村の分野においてもシステムの設計思想が問われる現状が散見される。今回の地震においてわかった酪農生産の維持が電力復旧のいかに依存してしまっていることや、種子生産を海外に依存してしまうことの危険である。

災害は忘れた頃にやってくるとは寺田寅彦の名言である。しかし現代の日本では忘れたくても忘れる暇無しに全国所構わずやってくることを覚悟しなければならない。それもこれまで以上のスーパー台風や南海トラフ巨大地震が襲ってくるかもしれないのだ。加えて質的にもこれまで想像もつかなかった新たなシステム上の災害(人為的な破壊も含めて)がいつ起こるかもしれない。こうした状況に対抗するため国土強靱化やレジリエンスという言葉がやたら叫ばれているが、その中味はまだまだ土木や電気通信工学的なレベルにとどまっているのではないか。

この機会に現代生活を支える基本システムの設計思想にまで踏み込み、効率性や便利さを少し損なっても自立と持続可能性を強めた新たな社会システムを考えるべきではないか。当然、農業・農村の分野においてもそうありたいものだと被災地の惨状を見て考えた。

((株)農林中金総合研究所 理事長 皆川芳嗣・みながわ よしつぐ)